



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」50号
Issue Date	1979-05-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66716
Type	journal
File Information	yuin50.pdf





附属図書館の機能について

附属図書館長 高 嶋 正 彦

発刊されて12年、「榆蔭」はいよいよ50号を出すこととなった。本号はたまたま外国図書収書計画を特集したが、この計画は、大学の研究上欠かせない、高額かつ入手困難な外国図書(大型コレクション)を輸入して、学内はもとより、全国ないしは地域大学間で、共同利用をはかりたいとする文部省の計画によるもので、本計画の実施によって、本学附属図書館における研究図書館機能は、さらに一段と高められるものなのである。

周知のように、附属図書館(本館)の機能には、研究、学習、総合、保存の4つの図書館機能をそなえている。これらの機能は、ここ数年来徐々に改善されてきたし、また今後一層改善される気運にある。

第1に、本学における人文・社会系学部 of 図書利用については、所蔵資料を附属図書館に全面管理換して、図書の利用(閲覧・貸出)や資料整理業務などの集中化をはかり、図書の管理・運営を附属図書館(本館)で行なおうとする基本方針がたてられ、既に法学部が実行に移しているが、これに引きつづいて文学部からも提案があり、いまその具体的方法を検討してる。ここれが実現すれば、人文社会系研究図書館としての機能がさらに高まるであろう。

第2に、これまで文部省および本学の配慮による年々の予算措置で、本学の蔵書は年間約8万冊のペースで増加しており、図書館に対する参考図書購入費、特別図書購入費(人文・社会系)などの予算に加えて、一昨年からさらに外国雑誌購入費が図書館に配付されるようになった。これは自然系一次資料について、部局間に共同利用できるものを拡充整備するファンドである。

このような措置は、附属図書館の人文社会、自然両系列の本学全部局に対する研究ならびに総合図書館機能を一層促進充実するものであり、図書館資料の全学共同利用という面からみても、また部局所蔵研究資料との補完的な意味からみても、極めて有効なものであるといえよう。

第3に、学生用図書購入費の増額や図書以外の視聴覚資料を使用しての学習(自習)を効果的にするため、所要の予算化がはかられた。これは学習用図書館としての機能を高めるものであり、特に教養分館はすぐれた視聴覚設備をもつ学習用図書館として、多くの本学学生により、今後なお一層の利用が期待されるものである。

第4に、今回の外国図書収書計画によって本学に購入保管されるコレクションは、ロシ

ア・東欧諸国の文学や歴史を研究する方々にとっては、極めて貴重な資料であり、広く全国的な共同利用の場を提供するものであって、学内の利用にとどまらず、学外の研究者にも利用され、地区センター館としての機能の充実にもつながるものである。

第5に、最近になって、総合図書館としての機能の改善が、学内における学術情報センターとしての機能の発揮を求めて動きは始めている。昨年のことになるが、本学における学術情報体制のあり方を検討するために、学術情報調査研究会が発足した。図書館が深くこれにかかわっていることはいうまでもない。

第6に、保存図書館の機能であるが、この改善は以上の諸機能にくらべると、ややたち遅れている。ご記憶の方も多いと思うが、北大改革検討委員会は、その図書館に関する検討報告(48年10月)で、「保存書庫新築のための計画を立ててその実現をはかるべきこと」を述べている。爾来既に5年有余を経過した。この間に図書館の機能、役割、そして内外の事情にも多くの変化が起きているが、本学所蔵図書は全学で約180万冊を越え、附属図書館(本館)書庫は既に満杯の状況である。これに対しわれわれはこのたび図書館委員会の了承のもとに、昭和55年度の概算要求に書庫の増築をのせることとし、いまそのつめを急いでいるのである。

以上図書館の機能について述べてきたが、附属図書館の機能の改善ないし近代化には、なお多くの問題があり、その道のりは遠い。図書館はその達成のために限りない努力を続けねばならないしまた続けて行く所存であるが、その支えになるものは、何といたっても本学の皆さんの理解と協力の姿勢である。

「榎蔭」50号を出すにあたって、これまでの学内ならびに学外、とくに文部省当局のご支援を深く感謝するとともに、今後ともよろしくお願い申しあげる次第である。

◆ 会 議

第95回 図 書 館 委 員 会

く と き 昭和54年3月22日(木)>

く と ころ 附 属 図 書 館 会 議 室>

1. 昭和55年度概算要求(案)について
2. 閲覧個室の選考について
3. そ の 他

全学図書(担当) 掛長連絡会議

く と き 昭和53年12月20日(水)>

く と ころ 附 属 図 書 館 会 議 室>

1. 外国雑誌購入について
2. そ の 他

全学図書(担当) 掛長連絡会議

く と き 昭和54年1月12日(金)>

く と ころ 附 属 図 書 館 会 議 室>

1. 文献複写業務の改善について
2. そ の 他

全学図書(担当) 掛長連絡会議

く と き 昭和54年2月26日(月)>

く と ころ 附 属 図 書 館 会 議 室>

1. 1978年版外国雑誌一括購入(前金払)の精算について
2. そ の 他

全学図書(担当)掛長連絡会議

<とき 昭和54年3月23日(金)>

<ところ 附属図書館会議室>

1. 昭和54年度洋書単行本の値引率について
2. 1978年版外国雑誌一括購入(前金払)の精算について
3. その他

昭和53年度外国図書収書計画の経緯について

昨年9月文部省学術国際局情報図書館課長名で、標記計画に関する照会をうけた。そのなかで「外国図書とは、学術研究上、緊急に必要な、外国で生産される図書館資料で、次の条件を満たすものをいう」とされていた。

即ち (1) 1セット当たり500万円以上であること。

(2) 当該年度内に確実に入手可能であること。

の2条件が掲げられていた。

当館としては、本省からの前記照会をうけて、直ちに調書作成にあたるため、学内全部局(図書掛等)に対し、当該条件を満たすことのできる部局ごとの収書計画案の提出を求め、国内、道内における所蔵の有無、図書館資料としての学術研究上の緊急必要性、資料入手の可能性などについて周到綿密な予備調査を進め、比較的短時間のうちに、全部局のものを調書にまとめあげ、期限内に提出することができた。

このことは、学内各部局や附属図書館が、平素学内研究者の要求度の強い文献、資料の掌握が十分に行なわれ、適確な収書計画が、たてられていたことが幸いしたものと思われる。その結果、当館提出の調書には、可成り多くの本学研究者の必要とする図書館資料があげられ、中味の濃い収書計画になり得た。

その後同年11月に至って、本学に対して昭和53年度外国図書購入費の配分額について文部省学術局長名で通知があったが、前記調書の中から今回ここに紹介する運びとなったロシア関係研究資料＝ソ連・東欧関係研究の三点のコレクションが地域共同利用図書として選定され購入が認められた。このことは今年度については本学のこの分野での研究の特異性が評価を受けたものと思われる。

平素入手困難な大型コレクションの収集と大学間の共同利用を推進するためにも、次年度もこのような計画の予算措置が継続され、本学における他の研究分野の中からも、将来資料入手が可能になるならば、本学の研究成果を一層高められるのではなかろうか。

そこで今回購入することとなった三点のコレクションについては、幸いなことに、本号に当学スラブ研究センター長外川継男教授ならびに経済学部荒又重雄教授、文学部灰谷慶三助教授から、コレクションについて専門的なお立場から玉稿を頂いておりますので、そちらをご覧頂くことにして、コレクション名とタイトル数のみを列挙するととどめる。

1. An East European Collection in Western Languages (約4,000タイトル、約5,000冊)
2. Boris Souvarine Collection (862タイトル約1,000点のパンフレット類)
3. 18th-Century Russian Studies (464タイトルのマイクロフィッシュ)

前記コレクションの購入契約については、特に適正を期するよう、関係当局からの注意もあったので、購入にあたっては事務局の関係係課と綿密に協議をかさね、遺漏のないよう万全

を期し、しかも短時日のうちに迅速、適確に、契約等に伴うすべての諸手続が完了するよう努力した。

この上は、一刻も早く学外共同利用も可能となるよう鋭意、受入・整理・運用のための諸作業を進めているが、整理済み後は三点とも特別のコレクションとして別置配架し、早急に図書目録を完成、配付して、研究者の利用に供したい。

これらコレクションは、比較的保存状態が良好ではあるが、なかには利用上直ちに補修、製本を要するものや、資料形態も多種多様であるため、収納管理上も特殊な配慮を要するものもあり、既に、100年以上も経過し、オリジナルの使用は、現在でも憂慮されるものも少なくないので、運用と管理については、細心の注意を要すると同時に、資料保存上も、できるだけ早期にマイクロフィルム化をはかるなど、検討を行なっている。

既に Boris souvarine Collection については納品が早かったこともあって、この関係の研究者が学外各地から早々と訪れ、コレクションの利用が始められ、絶大な評価がなされていることは、当館としても大きな歓びである。将来、多くの研究者によって利用されることが予想される。

目下、受入・整理作業進行中で、目録作成など多くの作業を残しているが、できるだけ早く完了させ、遅くとも今秋までには関係諸機関に図書目録の配付ができるものと予想している。

最後に本計画の実現のため、ご尽力頂いた文部省情報図書館課、ならびに学内にあって今回のコレクションについて、それぞれご専門の立場からご助言、ご協力下さった、本学スラブ研究センター、本部事務局関係各位にお礼を申し上げます。

(整理課 受入掛長 高橋 裕)

An East European Collection in Western Languages

(ヴェルナツキー文庫について)

スラブ研究センター センター長 教授 外 川 継 男

[ヴェルナツキー教授について]

このたび北大の中央図書館にスラブ研究の分野にたいへん貴重なコレクションが入りました。これは6年前の1973年6月に亡くなったアメリカのユール大学のジョージ・ヴェルナツキー教授の蔵書を中心とする、英・仏・独・伊の諸語で書かれた約4,000点、5,000冊余のロシア・東欧史に関する文献から成っています。

旧所有者のヴェルナツキーという人は、1887年ペテルブルグ(現在のレニングラード)に生まれ、革命前にモスクワ、レニングラード、ベルリン、フライブルグの諸大学などでロシア史を学んだあと、1914年にペテルブルグ大学の私講師になりました。ロシア革命後そのカデットに近い立場から亡命を余儀なくされ、アテネ、プラハを経て、1927年に米国コネチカット州ニュー・ヘヴンにあるユール大学に招かれ、亡くなるまでこの地でロシア史の研究に従事し、かずかずのすぐれた業績をあらわしました。

アメリカのロシア史研究の分野では、二人の亡命ロシア人が大きな足跡を残しています。その一人はハーヴァード大学のカルポーヴィッチ教授で、彼はすぐれた多くの弟子を養成しました。もう一人がこのヴェルナツキーで、カルポーヴィッチとは対称的に、シャイで書齋人であった彼は、派手な政治活動よりも、地味な著述の仕事に専念し、全5巻から成る『ロシア史』

(1943~69)をはじめ、すぐれた著作を遺しました。この著書は古代からピョートル大帝までの時期を扱ったロシア史の概説で、ロシア語以外で書かれたものとしては、今日もっとも重要なものの一つにかぞえられています。この著作が示すように、ヴェルナツキーの専門は、ロシア史の中でも古代・中世にありましたが、ピョートル以前のロシアはポーランドとの関係がきわめてふかく、そのためもあってか、今回購入したヴェルナツキーのコレクションの中には、1,000点近いポーランド史関係の文献が含まれています。

ヴェルナツキーはまたロシア史の基本的な特徴を「ユーラシア」という概念から説明するなど、いくつかの大胆な仮説を提唱しました。それらは後に批判されたり訂正されたりしましたが、いずれも学問上の討論を活発にし、研究水準の向上に役立ちました。

なおわが国ではすでに1953年に、坂本是忠、香山陽坪の両氏によって、ヴェルナツキーの亡命後最初の著作である一巻本の『ロシア史』(初版1929, 邦訳は1951年版)が翻訳、出版されています。これは最初ロシア語で書かれ、ついで英訳されて出たものですが、邦訳も含めていくつかの国の言葉に訳され、ヴェルナツキーの名を高からしめるのに役立ちました。彼は渡米直後は英語よりむしろ独・仏語をよくしたといわれていますが今回の蔵書の中には、独・仏語の文献が多く入っています。

[ヴェルナツキー文庫の内容と特徴]

このコレクションの3,886タイトルの内訳は以下のようになっています。

(1) 英語によるロシア関係	687
(2) 英語によるロシア文学関係	170
(3) 仏語によるロシア関係	569
(4) 独語によるロシア関係	340
(5) 英語によるポーランド関係	273
(6) 仏・伊語によるポーランド関係と西洋史	324
(7) 独及びそれ以外の言葉によるポーランド関係	239
(8) チェコスロヴァキア関係	126
(9) 独・仏語によるブルガリア関係	95
(10) ユーゴスラビア関係	103
(11) 他のバルカン諸国関係	144
(12) バルト諸国関係	214
(13) その他	600

この蔵書は18世紀に出版されたものから1960年代にいたる文献を含んでいますが、その中心となるのは、1920~40年代の出版物と言えるかと思います。ところでわが国の図書館には国会図書館も含めて、スラブ地域を対象とする文献はきわめて乏しいと言わねばなりません。とりわけ1950年以前のものは、ごくわずかしきありません。ただ定期刊行物に関しては、近年欧米諸国で重要なもののマイクロフィルム、マイクロフィッシュ、さらにリプリント版も作られて市販されるようになり、かなりラックを埋めることができるようになってきたのは、よく知られているところです。しかし単行本となると、ごくわずかな名著の覆刻があるにすぎず日本の研究者は今日なお欧米の研究者に比して、この面でハンディキャップを負っています。

この点からしても、このたびのヴェルナツキー・コレクションの購入は画期的なことといわねばなりません。これがマイクロなどでなく、5,000冊余の現物だということは、何よりも特筆すべきことです。これからロシアや東欧の歴史や文学を研究しようとする者は、このコレ

クシヨンによって、はかり知れない恩恵を受けることでしょう。

ただひとつ残念なのは、この中にはロシア語の本がないということです。今はソ連政府は1945年以前に出版された本の国外持出しを禁止していますので、古いロシア語の本の購入は西側の古書業者を通す以外購入の道がありません。しかしこれがきわめて高価だということも周知の通りです。

Boris Souvarine Collection

(ボリス・スヴァーリンコレクション)

経済学部 教授 荒 又 重 雄

これは、恐らく間違いなく、北海道大学附属図書館が世界に誇る宝の一つである。

B. Lazitch の『コミンテルン人名辞典』によると、Boris Souvarine は1895年に手工業職人の子としてキエフに生れ、のちパリに移住して製図工の徒弟となった。第一次大戦に参加、1916年に除隊してのち国際主義の主场をとる社会主義ジャーナリストとなり、1919年にコミンテルン国際問題部員となる。1920年逮捕され、1921年に釈放され、のちコミンテルン第三回大会にフランス代表として参加、執行委員会と幹部会のメンバーに選出され(のちには書記局にも)、1924年おそくまでモスクワに留まった。トロツキーを擁護したためにコミンテルンとフランス共産党の双方から追放された彼は、1925年にパリに戻ると、共産主義反対派グループを助けてジャーナリストとして活躍するが、1929年にトロツキーとも決裂し、やがて政治活動をやめた。しかし1935年には著書『スターリン』を出版したほか、ソビエト・ロシア問題に関する発言を続けた。第二次大戦中はアメリカに避難し、1947年に再度フランスに戻って、以後も執筆活動を続けた。

このように Boris Souvarine 自身の政治的・思想的活動は全くといっていいほどコミンテルンの内と外をめぐっているのだが、北海道大学附属図書館が入手したコレクションの内容は、主として1880年代から1910年代までに出版されたロシア革命運動に関する文献であり、ロンドンやジュネーヴで、あるいは1905年から1907年ころのペテルブルグやモスクワで、ロシア語で印刷された革命運動の内部文献である。古いものからあげると、1864年にロンドンで出されたオガリョーフの文献、1874年にロンドンで出されたラヴロフの文献、1880年代から1890年代のはじめにかけてロンドンで印刷されたテロリストたち(モロゾフ、ペロフスカヤ、ジュリヤボフ、キバリチッチ、ステプニャク)に関する文献、1890年代を中心にした「労働解放団」のメンバーたち(プレハーノフ、アクセルロード、ザスーリチ、デイチ)による文献、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ロシア社会民主労働党が生れ出てくる過程で主としてジュネーヴで印刷された諸文献、たとえばマルトフやマルトィーノフやプロコポヴィッチの筆になるもの、ロシア各地の労働運動の報告をもとにまとめられたものと思われるシリーズなど、さらに、ロシアの労働者革命運動の準備期におけるマルクス文献のロシア訳、運動の昂揚期における第二インターナショナル系理論家(ラファルグ、ゲード、カ・リープクネヒト、カウツキーら)の文献のロシア訳、等々、目をみはるようなものが並んでいる。第一次大戦の開戦前後のものもみのがせない。

いま少し具体的にいくつかについて紹介すると、プレハノフが反撃したことでも有名なエリ・チホミロフの『なぜ私は革命家であることをやめたか』(1889)があるし、レーニンの『何

を為すべきか』の前史をなすことで有名な『ラボーチェエ・デエロ編集部へのロシア社会民主主義者の抗議』(ジュネーヴ, 1899)があるし, 1897年6月2日付の工場法に関する秘密文書を暴露した文献(ジュネーヴ, 1898)——オボレンスキー公の周辺が資料の出所ではあるまいかとわたくしは想像しているのだが——もあるし, 1907年エス・エル第一回大会で採択された綱領・規約の文書もある。毛色のちがったものとしては, ジョルジュ・ロンゲによる『日本における社会主義』(ジュネーヴ, 1904)と題する文献だとか, ペ・ラヴロフがソーニャ・コヴァレフスカヤを記念した文書(ジュネーヴ, 1891)が目につく。とにかく興味深いものである。

保管状態はとてもよい。多くは小さなパンフレットといってよい文献であって, ちょっとでも注意を怠ればたちまち風化して果てていたであろう。現物に触れるとその感を深くする。それらが80年, ものによっては100年の歳月に耐えてわれわれの眼前にあるのをみて, わたくしはこのコレクションの成り立ちについての想像を刺激された。これは, ひょっとして, いわばコミンテルン時代人としての Boris Souvarine が自分の関心から自分個人で蒐集したコレクション以上のものなのではあるまいか。彼の一世代前のロシアの革命的インテリゲンツィア達が, 自分たちの運動を記録するために文献の蒐集と保管を必要として, その責を負った人あるいは人々, そのことに意義を感じた人あるいは人々の努力があって, その成果が何らか歴史的な偶然によって彼の管理下に入ったのではあるまいか。彼は先輩の意志を体してコレクションを守ってきた。コレクションの特徴は, ボリシェヴィキとメンシェヴィキの対立が激化するまえの時期の, ロシア革命家の在外活動を最も大きく含んでいることにあるから……。

この宝物が永く大切に保管され, かつはその内容がひろく学界に利用されることを切望する。

18th-Century Russian Studies (Microfiche)

(18世紀ロシア研究叢書)

文学部 助教授 灰谷 慶三

この度, 53年度の文部省特別予算によって, 「18世紀ロシア研究叢書」(18th-Century Russian Studies, Editor: Dr. A. G. Cross, Microfiche edition, Inter Documentation Company, Switzerland)が購入されることになった。18世紀ロシア研究は, 1968年にイギリスで British Universities Study group on 18th-Century Russia が創設されるなど, ここ10年ほどの間に欧米ではかなり進んできたとはいえ, 19・20世紀ロシア研究に較べるならば非常に立ち遅れていることはいふまでもない。そして, 日本においては欧米よりもさらに遅れているのが現状である。その大きな理由のひとつが, 18世紀以降ロシアで出版された一次・二次資料の入手が極めて困難であったことである。今回購入される叢書は, もちろん, これによってすべてが解決されるものではないが, 18世紀のオリジナル版, および19・20世紀版による18世紀作家の著作集や重要な雑誌類, 諸種の法令集, 会議録, 書簡, 回想記, 研究文献等, 文学・思想・歴史・政治・経済・法律・地理, さらに広く文化一般にまで及ぶ広範囲の資料・研究を網羅して, 総数464点から成り, その大部分はわが国の図書館に現存しないものである。従って, 今後, 本叢書は各方面から利用され, 研究の発展に大きな役割を果たすものと期待される。以下, その内容についてごく簡単に紹介してみたい。

まず, 大まかに分類すると, 総数464点のうち, ①文学・思想・文化一般にわたるもの

約 210 点, ② 歴史・政治・経済に関するもの約 170 点, ③ 書誌類 (上の両者に関するものも含む) 約 80 点である。これを刊行年次別にみると, ① では, 18 世紀 20 点, 19 世紀 98 点, ② では, 18 世紀 11 点, 19 世紀 85 点, ③ では 18 世紀 2 点, 19 世紀 61 点である。残りは ① ② ③ とともに 20 世紀の刊行であるが, その半数以上は革命以前のものである。以上の他に, ごくわずかではあるが 17 世紀の出版物もある。

以上のうちから主要なものをいくつかあげてみよう (カッコ内は刊行年)。作家個人の著作集・全集としては, カンテミール (1867~68), トレジアコフスキイ (1752), スマローコフ (1787), デルジャーヴィン (1864~83), カラムジーン (1848) 等の主要作家の他に, ワシーリイ・マイコフ (1867), クニャジニン (1847), アブレシモフ (1849), バルコフ (1872) 等の作家の作品集も含まれている。ことに, ロシア古典主義の代表者スマローコフの全集は, ノヴィコフの編纂になるもので, 今日に至るまで全集として唯一の存在である。同じノヴィコフ編纂の「ロシア古典全集 10 巻」(1773~75) や, 「ロシア劇作全集 vol. 1~43」(1786~94) など, 古典主義研究にとって欠かすことのできない資料である。また, プィピン編纂の「エカテリーナ二世著作集 12 巻」(1901~07) や, そのエカテリーナ二世の文化面での補佐役であったダシュコワ夫人のメモアール (1907) なども眼を惹く。

歴史・政治関係では, 「ピョートル大帝書簡・文書集 7 巻」(1887~1918), 「エカテリーナ二世訓示集」(1893), 「ロシア帝国法典全集 1649~1916」(1830~1916), 「ロシア貴族家系図 2 巻」(1787), 「帝室科学アカデミー総会議事録 1725~1803」(1897~1911) 等がある。

また, ① ② を問わず雑誌をあげれば, ノヴィコフ編集の「Koselek」, 「Truten」, 「Zivopisec」(いずれも 19 世紀の復刻版), ダシュコワ夫人編集の「Sobesednik Ijubitelej rossijskogo slova」(1783~84), カラムジーン編集の「Moskovskij žurnal」第 2 版 (1801~03), また「Političeskij žurnal」(1790~1802) 等がある。

これらの他にも, フリーメーソン関係の文書・研究 3 点, 分離派教徒に関する文書・研究 5 点等があり興味をそそる。さらに, 前述した数多くの書誌類にも 18 世紀の人物事典, 地理事典等貴重なものが少なくない。

以上, 紙数の関係でほんの一部を紹介するにとどめたが, その全容は実現してみなければわからないわけで, 一日も早い公開が待たれるのである。

◇ 人事往来 ◇

新図書館委員

森	泉 (経済学部教授)	54. 4. 1
越	昭三 (理学部教授)	54. 4. 1
野村	哲士 (薬学部助教授)	54. 4. 1
東出	功 (文学部助教授)	54. 4. 1
佐々木	喜美子 (理学部教授)	54. 4. 1
安藤	毅 (応用電気研究所教授)	54. 4. 1
東	市郎 (免疫科学研究所教授)	54. 4. 1
遠藤	博也 (法学部教授)	54. 4. 28

採用

田山	美樹子	整理課整理掛	54. 4. 10
大蔵	かえで	整理課教養分館整理掛	54. 4. 10
丸山	恵子	整理課教養分館閲覧掛	54. 4. 10

配 置 換

- 竹 見 悦 子 整理課総務掛 (閲覧課参考掛) 54. 1. 1
 遠 藤 雄 作 整理課課長補佐 (保健課課長補佐) 54. 4. 1
 笹 哲 夫 医学部附属病院総務課課長補佐 (整理課課長補佐) 54. 4. 1
 坪 田 充 弘 整理課学術情報資料掛長 (整理課教養分館閲覧掛長) 54. 4. 1
 杉 尾 勝 茂 閲覧課第二運用掛長 (理学部図書掛長) 54. 4. 1
 田 中 一 郎 理学部図書掛長 (整理課学術情報資料掛長) 54. 4. 1
 堅 田 政 孝 経済学部図書掛長 (閲覧課第二運用掛長) 54. 4. 1

転 任

- 山 口 国 雄 整理課教養分館閲覧掛長 (旭川医科大学教務部図書課閲覧参考係長) 54. 4. 1

転 出

- 伊 藤 秀 治 旭川工業高等専門学校庶務課図書係長 (閲覧課第一運用掛) 54. 4. 1
 藤 島 隆 旭川医科大学教務部図書課閲覧参考係長 (閲覧課参考掛) 54. 4. 1

退 職

- 君 波 藤 子 (整理課整理掛) 54. 3. 17
 井 上 佳 子 (整理課教養分館整理掛) 54. 3. 30
 蓮 沼 博 子 (整理課整理掛) 54. 3. 31
 田 村 悦 子 (整理課教養分館閲覧掛) 54. 3. 31

北海道大学附属図書館報 「檜蔭」 (通巻 50 号)

1979 年 5 月 7 日 発行 発行人 矢 部 一 郎

編集委員 横山梅雄 (長)・若月 修・遠藤雄作・似鳥正吾・野地俊郎・高橋 裕・坪田充弘
 遠 昭二・平田忠夫・杉尾勝茂・山本幾夫・船木敏美・山口国雄

発 行 所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 電話代表 711-2111 (2967)

印 刷 所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北 3 条東 7 丁目 電話代表 231-5560-5561